

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
主席
研究員16 長野駅周辺を
考える

幾度も述べているが、近代長野市の都市構造は、モータリゼーションの発達とともに郊外へのスプロール化（※）が進行したことで、中心市街地の空洞化を生み、不連続なシヤッター街を出現させた。

権堂周辺、そして新田町交差点を含む以南の商店街も、今や1950年代から約20年間の栄華が夢の跡と化していることは言わずもがなである。

そのような中、今ひとときわ輝くのが、県内最大規模を誇るターミナル駅である長野駅を軸とするその周辺だ。

長野駅は、ご存知の

ように、善光寺表参道の起点となる善光寺口と、現在土地区画整理事業の終盤を迎えた東口に分かれ、それぞれを駅舎内を縦貫する東西自由通路、東西連絡地下通路で結んでいる。

また、善光寺口については、駅の所在する南千歳町、末広町がその大半を占め、東口については、栗田地区がその大半を占めている。

東口については後述するが、今、最もにぎわいを創生しているのは、善光寺口に通じる南千歳町界隈と千石・末広町界隈である。

現在の長野駅には、JR東日本の北陸新幹線・信越本線、しなの鉄道の北しなの線、そ

して長野電鉄の長野線が乗り入れるとともに、アルピコ交通、長野電鉄の定期バス路線のほぼ全線が同駅前を発着点とすること、まさに、市の大結節点となっている。（続く）

※スプロール現象Ⅱ
都心部から郊外へ無秩序、無計画に開発が拡散していく現象

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商會役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長



現在の長野駅善光寺口